

序 文

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の第2回国際シンポジウムは、2009年12月12日(土)、13日(日)に法政大学市ヶ谷キャンパスで開催された。同シンポジウムは第2班(政治班)を中心に組織されたものであり、「ユーラシア地域大国の政治比較」を全体のテーマとし、基調講演、ラウンドテーブルからなるパネル・ディスカッションと三つのセッションが用意された。基調講演では3名の講演者が、それぞれ旧ソ連・ロシア、中国、インドに焦点を当て、比較分析の視点から政治改革、経済自由化の流れを分析した。ラウンドテーブルでは、パネルリストたちが地域大国の比較研究は何が可能であるか、何処に着眼すべきか、異なる地域の研究者はいかに連携し共同作業を行っていくかを中心に議論を展開した。3つのセッションでは、第2班を中心に報告者が基層政治、宗教政治および社会的亀裂に焦点を当て、比較研究の中間成果を発表した。

本論集に収録したものは、基調講演とラウンドテーブルでの各討論者の発言をまとめたものである。基調講演のうち、塩川講演はペレストロイカとは何であったか、冷戦終焉とは何を意味したか、ソ連の解体は何を意味したかという3つの問いを中心に展開し、旧ソ連の教訓が中国の改革戦略に与える影響をも分析した。中兼講演は、経済体制の移行、特に所有制と市場に焦点を当て、経済学の理論を踏まえながら、移行の経路、制度化の進捗状況、政治体制との組み合わせ、資本主義の精神との関連で中露の移行戦略の比較分析を行った。絵所講演は、インドの経済自由化の背景として国際環境と国内環境の変化、インド経済発展のダイナミズムと限界を分析したうえで、経済発展にとって政治体制は必ずしも決定的な要素でないことを力説した。「権威主義体制の有効論」、発展モデルの比較を念頭に置く分析である。

ラウンドテーブルでは、司会者の毛里和子教授が、地域大国の比較研究に関する方法論、共同作業の着眼点と枠組みについての討論事項を用意した。田畑伸一郎氏は、プロジェクトの代表として比較の目的を説明し、地域大国の共通性として、欧米モデルとの相違、自由化、対外開放、経済への国家の介入を提起した。近藤則夫氏は、インドの経験を踏まえながら民主主義という普遍的な価値を比較の尺度にすべきとの見解を示した。天兒慧氏は、国際秩序の形成能力に着眼し、中国は地域大国からグローバルパワーになりつつあることを強調した。高原明生氏は、多民族的な大国といった共通点に着目し、国民統合の在り方に関する地域大国の比較分析の重要性を提起した。松里公孝氏は、地域研究者が比較研究を行う際に、言語、フィールドワークの能力、ディシプリンの重要性を説いた。

本論集に示された貴重な知見は、各地域大国の個別性を浮き彫りにしたと同時に、これらに共通する普遍的特性の抽出に向けた共同作業の課題、そして方法論的な合意を示したと思われる。

第2回国際シンポジウム

組織委員長 唐 亮